

会議名	令和6年度	開催日	令和6年9月24日(火)
	第1回台東区立図書館に関する意見交換会	時間	午後7時～8時30分
		場所	生涯学習センター504研修室
出席者	大串夏身委員長(昭和女子大学名誉教授) 野末俊比古副委員長(青山学院大学教授) 田島大輔委員(公募区民) 森真奈委員(公募区民) 松尾敦委員(台東区立松葉小学校校長) 足立祐子委員(台東区立富士幼稚園園長) 山藤弘子委員(台東区社会教育委員) 三瓶共洋委員(台東区教育委員会生涯学習推進担当部長)		
配布資料	事前配布資料 「令和6年度 台東区立図書館に関する意見交換会委員名簿」 「台東区の図書館 令和5年度 事業報告」 資料1「台東区子供読書活動推進計画(第五期)施策体系(案)」 資料2「台東区子供読書活動推進計画(第五期)計画各課まとめ」 資料3「台東区子供読書活動推進計画(第五期)新規事業」 資料4「(資料編)子供の読書に関するアンケートの結果について」 資料5「電子書籍サービスについて(案)」 参考資料「台東区子供読書活動推進計画(第四期)」 委員からのご意見		
内容	1. 開会 配布資料の確認 2. 挨拶 台東区教育委員会生涯学習推進担当部長 三瓶委員 3. 委員紹介 4. 議事 (1)正副委員長選出について ○大串委員長、野末副委員長を選出 (2)台東区子供読書活動推進計画(第五期)について 【委員長】 ヨーロッパでは、情報社会で活躍できる人材育成のため、0歳児からの読書や図書館の充実、教育改革の推進という取り組みが、1970年代後半から取り組まれるようになった。一方、日本では、江戸時代頃は多くの人が読書をしてきたが、近代化の中で徐々に読書率が下がり、特に最近の若者が印刷物の本を読むことはかなり少なくなっていると思われる。日本でも0歳児から本を読む、本に親しむということを積み重ねていく必要がある中で、今回の推進計画は非常に重要で、ぜひ委員の皆様からいろいろとご意見をいただき、よい計画を作りたいと思う。 ○資料1～4について、事務局から説明 【委員長】 ただ今の事務局の説明について、ご意見・ご質問はありますか。		

【委員】

ノーテレビデーの名称について、2つ考えがある。

まず、テレビ時間という言葉については、現代だとテレビだけでなくタブレットやスマートフォンがあるので、スクリーンタイムに代替可能かと思う。

次に、ノーテレビデーという名称には、ネガティブな響きを感じる。

現代においては、大人でもノースクリーンをお願いされたとしても絶対にしないと思われる中で、それを標語にすると、心地よさとしては適さないと思う。

例えば、目にやさしい日という意味で、未就学児を対象とするなら「うさちゃんの日」、全体を対象とするなら「目の健康の日」など、もう少しポジティブな表現のほうがよいかと思う。

【委員】

事前に送付した資料をもとにお話する。

まず、ノーテレビデーの名称については私も同意見で、ポジティブな表現のほうがよいと思う。ChatGPTに条件を入れれば案を作ってくれるので、それらの中から選ぶのがよいと思う。

全体の意見を述べる前に、事務局が事前に行ったアンケートを集計してみた中で分かったことをお伝えする。

まず、子供たちがどこかのタイミングで本を読まなくなるということが明らかになった。

小学2年生のころはまだ結構読んでいるが、1月に10冊以上読むような子供は、中学2年生になるとほとんどおらず、全く読まないという子供がほぼ半分くらいになる。

小学6年生や中学生のあたりで、読まなくなるタイミングが来ていると思う。

同じように、図書館自体も使わない子供が、中学2年生になると83%に増えているので、やはりこの辺りに壁があると思われる。

学年が上がると本を読まなくなっていることと、そもそも本に興味がない子供が3割ほどいるということが、本を読まないという結果につながっているのかもしれない。

内 容 これから図書館をいろいろな場として活用していくことが今回の目的の1つでもあると思うので、まずは来てもらうということも考えなければならない。

図書館に来るきっかけややりたいことを見ると、友達と来て勉強するといった方が、学年が上がれば上がるほど増えている。

私見だが、ファーストフード店で話している中高生はとても楽しそうであるため、あのような雰囲気でも、友達と話しながら勉強できるようなエリアやスペースがあったらよいと思う。

そこに来てもらえれば、様々な情報を共有することも可能になると思う。そのような中で本に興味を持ってもらう活動をしていくのがよいのではないだろうか。

また、イベントについては、知らないという方がほとんどであるため、どのように周知するかが課題。

好きな本の種類については、電子書籍でも同じだと思う。

2ページ目以降は、事前の質問への回答や、気づいたことをコメントしている。

まず、資料2の予定事業に対して、区立図書館の見学というのは、やはり来てもらうのが一番と考えているため、よいと思っている。

その時に、単純に図書館の全体的な紹介というよりは、具体的にどのようなものやサービスがあるかというところと一緒に、何か楽しそうというように感じてもらえるようなイベントになるとよいと思う。

10代を対象にした読書の啓発について、アンケート結果にもあったように、やはり来てもらうというのは重要で、中央図書館が新しくなるタイミングで、友達と勉強したり、しゃべることができるエリアができればよいと思う。また、ある程度飲食も可能にしたほうがよいと考えている。

そのようにして、まずは来てもらうことで、何かしら啓蒙することも可能になってくると思う。

勉強に来るといっているのであれば、受験とかテスト対策に直接効果があるようなものもいいかもかもしれない。

少し極端かもしれないが、10代専用のデジタルポイント等を付与して、それがいっぱい溜まるとジュース等が買えるなどをやったら楽しいかなと思う。

次に、子供の読書活動支援事業について、何をやっていいかわからないということであれば、区民同士で情報交換することが大事だと思う。

台東区として、SNSやWebサイト、アンケートの公開など、何かしら情報共有する場というのを工夫して用意するというのも、一つの手かと思う。読み聞かせで、こういう本がよかったなど。

次に、中高生ボランティアの活用について、これは非常によいと思う。

今の若い子たちはネットでしか知らないことも多い中で、図書館に来てもらって経験するという事は非常にインパクトを持つため大事だと思う。

内容も、資料にあるような展示コーナー作成などだけではなく、何かその生徒が興味を持つものを提供してあげたらよいかと思う。例えば、クリエイティブなものだけでなく、本を整理するというような体力を使うようなものを実施し、体育会系の子が来てくれるなど、幅広い子供たちが参加できるようなコンテンツ、ボランティアの作業を準備してあげるのがよいと思う。

学校との連携という意味では、夏休みの活動ということでやってもらう、部活・委員会活動等と連携するなど何かしらのきっかけがあるとよいと思う。

また、少なくとも図書館に興味があるから来ていると思うので、来た生徒から図書館の活用とか、読書の推進など、当事者の意見として聞いてみると、とてもよい意見を聞くことができる可能性がある。

次に、周知方法について、ポスターはお金がかかるので、デジタルサイネージ等を使って、様々な情報をシェアするのがよいかと思う。

台東区としてLINE等のSNSは既にあるが、図書館専用のものがあるのもよいのではないか。

子供が友達登録したらポイントをあげるとか、現在メジャーなインスタグラムなどを使うとか、マーケティング的なことをやっていくのもよいのではないかと思う。

続いて電子書籍について。

メインターゲットが子育て世代というのはとてもよいと思う。

学校での朝読書も、読書の習慣づけにとてもよいと思う。

予算が許せば、もう少し幅広く高校生ぐらいまで広げるか、小中学校時代に利用した人は継続させるのもよいのではないかと思う。

また、ベストセラーについては、紙の書籍が5冊くらいあっても半年くらい先でないと予約の順番が回ってこないことがある。ビジネス書では半年先だと意味がないこともあるので、そのような書籍をタイムリーに借りられるとよいと思う。

【委員長】

学校・園関係の委員からもご意見をいただきたい。

【委員】

意見交換会にあたり、学校図書館(図書室)が実際どのように活用されているか調べてきた。

本校の場合、図書室の座席数は40席、机は8台、蔵書は8,000冊弱あり、主に授業で活用している。

低学年は国語の時間が週に8時間。1日あたり2時間国語がある。したがって、国語(図書)という形で45分間を国語の時間にすることができる。

一方、高学年は、国語の時間は週に5時間。1日あたり1時間のため、国語の時間として1時間とってしまうと国語の授業が進まなくなってしまう。

低学年のうちに図書室の利用方法をきちんと指導して、どういうときに図書資料を活用するとよいのか、ということまで指導するのが理想的である。

総合的な学習の時間などの調べ学習に際し、事前に担任から学校司書にテーマを伝えておくと、関連する図書を学校にある範囲で集めて、持ってきてもらえる。これは非常にありがたいことと思っている。

また、一定数の本が必要な場合は、中央図書館にお願いして区内各図書館から集めてもらい、団体貸出という形で借りることもある。

本校の場合は、年に2回、図書室で図書イベントを行っており、図書ボランティアの方に手伝っていただいたり、図書委員の児童が中心となって読み聞かせをしたりしている。

また、スタンプラリー・福袋・ビンゴゲームなど、図書室に行くのが楽しいというところをきっかけに、本を手にとってもらいたいという思いがある。

また、通常は1冊しか貸さないところ、長期休暇に入る前には3冊貸し出しており、特別貸出期間ということで大々的にアピールをしている。

子供たちの傾向として、漫画や、タブレット等スクリーンを通したものは簡単に見ようとするが、活字の紙ベースの本は、集中力が必要になるからなのか、相当能動的に読みたいという欲求がないと読まないというところがあると思う。これが児童の不読率の1つの原因であるように思う。

そのことを考えると、読書がルーティンになるくらい、小さなうちから本に慣れ親しむ、本を読むと分からないことが解決する、楽しい世界が待っているということを実感させなければならぬと思う。

大きくなればなるほど、スマートフォン等、考えなくても情報が入ってくるものに流れていくのではないかと感じている。

【委員長】

楽しいというのはなかなか難しい課題だと思う。

【委員】

幼稚園では、推進事業の中にあつた「あかちゃんえほんタイム」というのが、本当に大事だと思っている。

0から2歳までの方を集めて月1回、未就園児の会を行っており、その中での読み聞かせやブックトークにより、絵本の楽しさを紹介している。そこが入り口となって、本が好きと思ってくれとよと考えている。また、図書館で実施している「あかちゃんえほんタイム」との相乗効果で、絵本を買って家でも読んでみようとなるのではないかと思う。

幼稚園では、親子読み聞かせということも月1回行っている。お迎えの15分前に集まってもらい、好きな本を15分間は読んでもらっている。親子で一斉に読み聞かせるため当初読みたくなかったお母さんたちもいるが、その中には、実際やってみたらよかったということで、これがきっかけで小学校の図書ボランティアや支援員として働いてくださる方もいる。

幼稚園と小学校の接続に関して、小学校の敷地内に幼稚園があるため、5年生が授業の中に入って交流することがよくある。その中で読み聞かせをしてもらっているが、小さい子向けの本を探しに図書館に行ってくれたり、読み聞かせの練習をしてくれたり、当日の読み聞かせで園児から喜んでもらえたりと、幼小の接続の中でも絵本はとてもよい位置取りであると思う。

幼稚園でも本の貸出を行っているが、幼稚園の子供は何回も同じものを借りていくということがある。大人が読みたい・読んであげたい本と子供が読みたい本が違うということが多々あるので、親子読み聞かせの際は、それぞれ1冊ずつ貸し出すということをしている。

園児の親に絵本の購入方法について聞いたところ、今はほとんど通販サイトなどでレビューを見てオンライン購入しているらしい。

図書館で実物を見たうえでオンライン購入であればよいのかもしれないが、地元の書店の消滅も危惧されているなかで、図書館をきっかけにした購入の機会もあったらよいかなとも思っている。

【委員長】

レビューを見て買う本を決めるという話が出たが、書籍出版後の編集者の最初の仕事はレビューを書くことだそうなので、意外と効果があるらしい。学術書でも評価を参考にして書く人がいるらしく、再考の余地があるのではないかと考えている。

【委員】

資料2のNo.15、「多文化共生に対応した読書サービスについて」に記載の、外国語図書コーナー設置は、ぜひお願いしたい。

次に記載の外国語図書に関する行事を実施し国際理解を図る機会を設けるということに関して、台東区はすでに国際理解というステージではなく、多文化共生であるので、「多文化共生の推進」などの表現にしていきたい。母語を外国語とする人たち向けのサービスではなく、日本人が、外国人と協働したり共創したりするヒントになるような仕掛けを図書館にしていきたい。

事前に資料を出させてもらった。そこに記載のとおり、外国人比率は今年の5月で8.9%で、幼稚園や小学校には

必ずと言っていいほど外国ルーツの子供がいる現状があるため、異文化理解ではないステージまで上げていかなければならない。

また、100か国以上の外国人が暮らしており、中国・韓国が多いが、そのあとに続くベトナム、フィリピン、インドなどは漢字がない国であるため、この方たちはどうしても文字媒体から外れてしまう。

資料に記載のとおり、在住外国人は定住予定者が多い。ともに台東区を作っているメンバーであることを意識し、図書館を本と場所ではなくて、拠り所となるようなデザインになるとよいと思う。

外国人住民は子育て世代も多い。外国籍の子育て家庭の特徴として、自力で図書館や読書活動につながるできないことが多い。

原因としては、やはり言語の壁と心の壁がある。

図書館から、楽しいイベント等のお知らせをしても、申込書には日本語だけで記載されているため、そのことが壁になって、利用者カードが作れなかったり、本が選べなかったりすることも多い。

日本人メインの図書館サービスとなっている現状を、再度検討していけたらと思う。

外国籍の子供が求める本について、どうしても外国語＝英語と考えてしまうが、最近はベトナムの方が増えているため、そのようなところも意識していったほうがよいと思う。

また、やさしい日本語で書かれた小説や物語というのも求められている。以前、外国籍の子供に読み聞かせした際、通常の日本語では全くわからなかったが、外国人留学生向けのやさしい日本語で読んだところ、一回で理解できたということがあった。

そのため、日本で生まれ育った子供向けのものだけでなく、親子で共有できるような、やさしい日本語のものも求められている。

また、区内在住の外国人に対し、最も理解できる外国語についてアンケートを行った際、8割の方は、自身の母語の次は日本語だと答えた。

ただし、話せる・聞けるという割合であって、文字が読める・書けるということではない。

そのため、音声によって読むこと・知ることができる書物が大変有効かと思うので、ぜひ取り入れてもらいたい。

最後に、リンゴの棚という活動を、多文化共生の方たちも推進しようとしている。

多言語の本を入れることは金額等のハードルもあるが、外国とよく関わる商店に声掛けするなどして、どこかのコーナーに多言語のものをシンボリックに置いてもらうことも大事かと思う。

このようなときも、日本人だけが選ぶのではなく、図書館リニューアルに向けて、ぜひ在住外国人をメンバーに入れてもらいたい。

また、生涯学習センターの4階が区の多文化共生の機能になっていくと聞いている。そこと連動するような形で、生涯学習センターに多様な方たちが集まれるような仕組みになっていくとよいと思う。

【委員】

社会全体が変わりつつあるため、我々もそれに合わせた形で考えていかなければならない。特に当事者の声を聴くのは大事だと思う。

【委員】

先ほどのお話は共感できることが多かった。

町の書店では、通常の本も売れない現状がある中で、外国語の本をいっぱい揃えることはできない。そういう意味でも、図書館が外国語の本を揃えていくことにはとても意味がある。

子供がどうやったら楽しく本と触れ合えるかという、まずは歌って読める本というものを図書館が発信してあげるとよいのではと思う。

観点としては2つ。まず、子供自身が覚えられるため、親が読み聞かせに疲れた時でも子供が勝手に進めてくれるということ。もう一つは、言語の壁を越えやすいということ。日本語だけでなく、海外の民謡なども入れていくと、自然と子供たちがお互いを分かり合えるような時間になると思う。

そのようなことを図書館が発信することで、楽しい場所という雰囲気にも繋がると思う。

【委員長】

いろいろな方からも意見が出ているが、やはり図書館は楽しいということが大切だと思う。

以前、関西の図書館に、夏休みに実際に図書館で働いたり、サービスしたりという体験を子供たちにさせていたの

を見に行った。体験の最後に「図書館って面白い。自分も将来図書館員になる。」という子供がいたが、やはりそういう気持ちになってもらえるといい。

「みんなで」という意見も出たが、昭島市の図書館を作った際、1階を交流コーナーにしたら、子供たちがおしゃべりしながらいろいろなことをやっていた。

やはり図書館は楽しいという気持ちになる仕掛けがないと、と思う。

副委員長にもご意見お願いしたい。

【副委員長】

一番確認しなければいけないことは、読書とは何かという話だと思う。

子供の読書というと、我々は活字の本を紙で静かに読んでいるというイメージがまだ強い。「読書」の幅を広げておき、子供たちもその読書をどう楽しむか、読書の多様性もある程度認めてあげることが大事だと思う。

資料3にあるような新しいことを始めるにしても、各項目では何を狙っているのかをはっきりさせたほうがよいと思う。例えば、読書の目的が文章を読む力をつけるためであれば、活字を読むべき。ただし、どういう種類のものを読むべきかといえば、そこは分かれてくる。また、楽しむためであれば、誰かが読んでいるのを聞いていたり、みんなで読むのでもよい。目的に応じて活動の重点が変わっていくと思う。

読書を包括的に定義して、その一部について、個々のサービス・事業についてはどこを狙っているのかを整理するとよいというのは、文科省の第5期読書推進の委員会に呼ばれたときに話したが、台東区としてもぜひ、そのあたりを整理しながら進めてもらいたい。

資料3の一つ目、デジタル技術の活用は絶対にやったほうがよい。私の共同研究チームが作ったAIで蔵書を検索するシステムを、ある自治体の図書館に入れている。自分で本を探せる図書館を使い慣れた人からは評判が必ずしもよくないが、そうでない人からは評判がよい。つまり、テクノロジーを使うことで、今まで図書館を使わなかった人にまで興味を広げることができる。

先ほどインスタグラムの話も出たが、今の子供たちは、読書よりも遥かにテクノロジーのほうに触れているため、そこに仕掛けをするということが大事だと思う。

次にアクティブラーニンググループの話だが、これも非常に大事である。なぜ読書をしないかということ、アウトプットが必要ないからである。例えば、読書感想文を書けよといったら本を読む。アウトプットを伴う、楽しむ場のようなものを作り、アウトプットがあるからこれをやらなければいけないという疑似的なニーズを作るのがよいと思う。ある意味では強制的にでも読ませると、その経験が次につながるため、尻込みせず堂々とやってよいと思う。

活動は様々認めるべきで、読書へのアニメーションなど、子供たちが楽しむための読書や読書の入り口のような仕組みがたくさんある。図書館に限らず、世の中にはこれができる人はたくさんいるため、そういう人たちの力を借りていくのもよいと思う。

また、先ほど委員からも話が出たように、ファーストフード店化についても大賛成である。今は高校の図書室でもカフェ風をしているところがある。そういう空間を作って活動を用意しておくことが大事かと思う。

アクティブラーニンググループの話に関連するが、みんなが読みたいものは貸さないというのも大事だと思う。図書館としては珍しい形だが、いい本がいつ行ってもそこにあるというのは大事である。

次に、大人の支援について、今の子供たちは、自分の信頼できる人からおすすめされたら、それを読むという文化である。先輩や友達がコメントや感想をつけたりと読むと思う。また、今の子供たちはネタバレが好きということもあるので、ストーリーやあらすじが分かったほうが手に取られるかもしれない。このように、今の子供たちの情報利用行動や読書行動をもう少し研究して、どういうものが効果的かということを考えていくとよいと思う。

【委員長】

読書の範囲を考えていくというのは、大事だと思う。

書店に行くと海外の読み聞かせの翻訳書があるが、それをのぞくと読書に関連して、書く読書・話す読書など、いろいろ行われていることが分かる。

次に電子書籍サービスについて、事務局から説明いただく。

○資料5について、事務局から説明

【委員長】

今の説明で質問があれば。

【委員】

この電子書籍は多言語対応や読み上げ機能など、バリアフリーになるような機能が随時更新されていくのか。

【事務局】

本によるため、機能が更新されるものではない。
なるべく読み上げ機能等に対応したものを買っていく。

【委員】

ターゲットを子供やバリアフリーの観点としているのはとても賛成だが、子育て世代にするというのは反対である。
育児情報についても、スマートフォンでX等の育児マンガを見ているほうが楽しいのだと思う。
また、世間一般の本を購入されている方は、紙の本を買えることや、そういった時間に余裕を持ちたいというところにニーズがあると思う。予算の制約もあるという意味でも、絵本や児童書などのジャンルに絞ったほうがよいと思う。

【委員長】

委員からも事前に意見をいただいているので、お願いしたい。

【委員】

音や視覚的な情報が同時に受け取れるというのがとても重要になってくるため、そのような、紙媒体ではできない機能の書籍は、ぜひ導入していただきたい。
例えば、やさしい日本語のNHKニュースなどでは、短く分かりやすい日本語で書かれている、難しい言葉の意味を解説してくれる、ルビの有無を選択出来る、本文を音読してくれるなどの機能がある。
そのようなものを一部でも導入できれば、距離的、気持ち的にも遠かった方がアクセスする機会になるかと思う。

また、子育て世代をターゲットにすることには、私も反対である。
やはり忙しいため、読むとしてもタブレットではなく、携帯でさらっと読むかと思う。
逆に、シニア世代に対して、この機会に電子書籍に慣れてもらうということや、外国の方や障害のある方が音で理解できるとよい。

対象の小中学生は、区立の小中学生だけか。

【事務局】

区立小中学校と連携して、ここの児童生徒に対し、手続きすることなくIDを配りたいと考えている。

【委員】

台東区は受験している子も多いため、区立小中学校に通っている子供ばかりではないので、そのような子供が地域の同世代とつながる場所としても図書館が機能するとよいと思う。先ほどの話にあった賑やかな場所やアウトプットして一緒に会話できる場所も欲しい。

【委員長】

副委員長は何かありますか。

【副委員長】

現状の電子書籍サービスは、1人が借りたら他の人が借りられないため、限定的な運用になるが、それを踏まえたうえで利用したほうがよいと思う。先ほどから出ているように、ターゲットやコンテンツを絞ることについては大賛成。どこに絞ればよいかについては、ベンダーが他の図書館や利用者についてのデータを持っているはずなので、そこに聞くとよい。
台東区の現状についてもリサーチを行い、対象に優先順位をつけてやっていくのがよいと思う。やはり電子書籍サービスは限定的になってしまうので、紙の本や来館してもらってのサービス、配送サービスなど、電子書籍サービス以外のところに繋げる工夫をしていくことで、かなりの部分はカバーできるのではと思う。

【委員長】

今、国会図書館が猛烈な勢いで資料のデジタル化をしていて、昔の資料を新刊と同じように読むことができるようになってきているし、地域の図書館に来て読むのとほぼ同じレベルで、自宅でも読むことができるようになってきている。

先ほど事務局の説明の中で、図書館に来なくても登録できるという話があったが、それは標準サービスにしていきたいと思う。

以上で議事を終了とします。

5. 閉会

【閉会后、委員より追加の意見】

絵本については、やはり紙の本物がいいと思うが、絵本の作家とコラボレーションして作成されたデジタル絵本は、読み聞かせと動く絵で楽しめるため、よいと思った。幼稚園にも来ていただいたが、子供達が大変興味をもって楽しんでいた。

読み聞かせを丸投げするのではなく、子供の心を豊かにするツールとして活用できるといいと思う。絵本のよさとデジタルを融合した絵本を上手に活用できるといいと思う。

電子図書のターゲットは、子育て以外の世代のほうが需要があると感じている。

むしろ、子育てではない世代のほうが時間もある。40～60代の方々は、通勤中にタブレットで読書する方が多くなってきている。荷物にならなくていいのだと思う。また、50、60代になると、文庫の文字が小さく読みにくくなっていく世代であり、そういったときに文字の拡大ができる则有難い。

ジャンルとしては、小説や歴史などが良く読まれるのではないか。また、料理本は、レシピを確認しながらつくる際には本よりタブレット画面で見たほうがいい。

偏らずにいろいろな種類の本があっていいと思う。

以上